

松原朗著『漢詩の流儀』（大修館書店、2014.11）―その増補部分―

本書は、『漢詩の事典』（松浦友久編、植木久行・宇野直人・松原朗著、大修館書店、1999.1）の「漢詩を読むポイント」のうち、「外形」に関わる「4 漢詩の形式」「5 詩学用語」等を除き「1 漢詩のテーマ」「2 漢詩の歳時」「3 詩語のイメージ」を元にしたものである。著者の言葉通り、『事典』を元にしつつも、著者の十数年の研究の進展の成果を採り入れて大幅な補正を行っている所が少なくない。項目については全く増減はない。各項目の本文において、その修正は全体に、より簡潔に分かりやすくという主旨でなされている。訳文についても、同じ主旨で、随処に改訂が施されている。細かいテニヲハや、部分的な表現の改編は全体に随処に見られ、ここで指摘する必要はないし、意味もない。大きな補正がどのようなものであるのかを指摘しておこう。

「漢詩のテーマ」での大きな補正は以下の通りである。

・31頁「送別」。日本では男女の別れが、普通だが、漢詩では男同士の別れが中心。これをいうのに、柿本人麿の「^{きさ}小竹の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ別れ来ぬれば」を挙げて、男女の離別が、男同士の離別にもまして切実であることを、1頁強を補って強調している。

・52頁「詠史・懐古」。李白の「蘇台覽古」等の懐古詩が、陳子昂の影響を受けたことを述べた後、「唐が起こってすでに百数十年、三国から南北朝時代と続いた大分裂時代を収束して、それ以前の全てのものが「今」と切り離された歴史となったこの時期に、初めて懐古詩は可能となったのである」。

・55,56頁。「辺塞」。岑参の辺塞詩「磧中作」を、新たに挙げている。

・69—71頁。「山水」。謝靈運の「登江中孤嶼」を新たに挙げて、山水の美そのものの追求が謝靈運に始まることを明確にしている。1頁半にわたる大幅な増補である。

「漢詩の歳時」での補正は以下の通り。

・94頁。「人日」。高適の「人日寄杜二拾遺」について、この詩が整然と四句（「解」）ごとに韻を換える、「逐解換韻格」の古体であることを記す。

・98頁。「清明」。杜牧の「清明」の紹介に続いて、「杜牧は晩唐の詩人。硬骨の官僚だったが、文学においては、酒の酔いの中に青春の日々をほろ苦く回顧するような詩にも佳作がある。それもまた晩唐という頹廢の時代を彩るものだった。……」の記述4行を加える。

・101,102頁。「上巳」。唐代の例として、李义「奉和三日祓禊渭滨」と鮑溶「上巳日寄樊瓊樊宗憲兼呈上浙東中丞簡」の二首を挙げ、唐代中期以後、次第に宮廷行事としての重要性を失ってゆき、鮑溶の詩のように、王羲之の蘭亭の風雅な集まりが回顧されることが多くなることを述べる。2頁にわたる増補。

・106頁。「端午」。僧文秀「端午」を挙げる。10行の増補。

「詩語のイメージ」での補正は以下の通り。

- ・134, 135 頁。「桃」。崔護「題都南莊」の挙例の後に、この詩が、孟棻『本事詩』の崔護と民家の娘との恋物語の中に出ていることを述べる。10 行の増補。
- ・147 頁。「柳絮」。劉禹錫「楊柳枝詞」を挙げた後に、詩中に出ている煬帝の離宮が、揚州で近年発券されたことを述べる。3 行の増補。これは、2013 年 4 月、揚州で煬帝の陵墓が発見された最新の発掘成果を採り入れたもの。
- ・157 頁。「菖蒲」。張籍「寄菖蒲」を挙例する。16 行の増補。
- ・164 頁。「茱萸」。杜甫の「九日藍田崔氏莊」を挙例し、吉川幸次郎が、杜甫はこの詩によって七言律詩の神となったというのを紹介する。ほぼ 2 頁の増補。
- ・168 頁。「落葉」。賈島「憶江上吳處士」を挙例した後、「賈島は苦吟の詩人であり……」と、苦吟の詩人、賈島を紹介、「秋風渭水に生じ、落葉長安に満つ」が、見事に長安の秋を描き取ったと述べる。4 行の増補。著者のこの間の晩唐初めの詩人たちの研究成果を反映したもの。
- ・175, 176 頁。「梧桐」。韓愈「秋懷詩」と白居易「晚秋閑居」を挙げた後、白詩中の二句が『和漢朗詠集』に収められていることを指摘し、韓愈よりもためらわずに白居易を選んだ日本人の好み興味深いという。6 行の増補。
- ・194 頁。「鷗」。中国では、内陸の河川にも生息すること、また鷗を自由という出来合いの觀念によらず、そのものとして描きながら深い印象をとどめる作として杜牧「漢江」を挙げる。2 頁弱の増補。
- ・195 頁。「烏」。事典の、烏は、文学には馴染まない鳥だったことを述べる 10 行ほどの記述を削除している。簡明化を心がける措置の一つだろう。
- ・255 頁。「北斗」。「登樓」の二句を挙げた後、杜甫がこの時、官職を失って成都に身を寄せ、吐蕃がしきりに侵略する時勢への嘆きが、詩の背後にあるとする。3 行の増補。
- ・255 頁。「参商」。杜甫「贈衛八處士」につき「人生相ひ見ざること、動もすれば参と商との如し」二句だけの挙例だったものを、「今夕復た何の夕ぞ、此の灯燭の光を共にす」の二句を加えて、杜甫の人情の厚さと、「今夕……」が『詩經』唐風「綢繆」の「今夕は何の夕ぞ、此の良人を見る」を踏まえていることを述べる。11 行の増補。
- ・260 頁。「雨」。杜甫「秋雨嘆」を挙げた後、「雨の中を遊び回る子供の姿を詩に描くなど、当時は文学としてはあり得ない」と述べる部分。3 行の増補。
- ・262 頁。「霜」。李白「秋浦歌」を挙げた後、李白の老境に触れ、「白髮三千丈」と詠じたのは、「誇張はもはや誇張であることをやめて、唯一無二の真実の表現」だと述べる。8 行の増補。
- ・278, 279 頁。「震」。則天武後の宮廷詩人杜審言の「和晋陵陸丞早春遊望」を挙げた後、則天武后が長安を嫌って、洛陽に首都機能を移し、杜審言はここで活躍したことを述べる。4 行の増補。